

ちんぐるま(稚児車)

初孫が双子で生まれたのが六月、昨年のうちに娘を二人とも嫁がせ、寂しくなっていたわが家に潤いをもたらされた。娘夫婦だけでは双子の世話は大変である。だからしばらく同居し子育て支援することになった。

「快ちゃん、蒼ちゃんが一番好きなジイーちゃんが帰ったよ!」…、私は帰宅すると、孫たちの顔を覗き込み、何はさておき、こう声かけするのが日課になった。最初は「違う、一番はママちゃんです」と言っていた娘も、そのうち、「一番好きなジイーちゃんが帰ってきたよ」と言うようになった。

「人の言葉は立つ位置を物語る」という言葉がある。祖父の立場に立った私は、ふと自分がジイーちゃんの視点で物事を考えていることに気づいた。…この子が育つ地域や学校はこんなに貧相なもので良いのか? この子たちを迎える日本社会にはあまりにも希望がなさ過ぎる等々である。

「可愛い」ということを、東北のある地方では「かなしい」と表現するのだそう。孫が可愛いというのは、悲しいくらい可愛いということだ。だから孫の未来に荒涼とした砂漠が広がっているようでは困るのである。

天国と地獄の夕食に、ある日同じご馳走がふるまわれた。そして、長い箸(はし)でそれを食べるよう条件がつけられた。長い箸でつまんで口に入れようとしても、長すぎて食べられない。そのため地獄の人々は苛立ち、箸でつき合い、楽しいはずの夕食はまさに地獄の光景となった。…天国ではどうだったのだろう。…天国の人々は、長い箸でご馳走をつまみ、お互いに食べさせ合い、心温まる夕食となったという。

この話を讀んだジイーちゃんの私は、日本の学校も社会もどこか地獄の光景に似ていると思う。なぜか人々はイライラし、お互いの悪いところを見つけると鬼の首を捕ったような気分で鋭く突つき合っている。だから全員が突かれることに対して防衛的になっている。こんな社会はたとえ突かれなくても不安な場所である。

「教育」という言葉は、文字通り「教えること」と「育てること」から成り立つ。これは十分に育てた上で教えるべきだからである。ところが今日では育てていないのに教えている。日本の教育の危機の原因はその一点にあるのではないかとジイーちゃんはふと思う。…では何が育てていないのか? 最も育てていないのは人間関係の中の「安心感」、人の気持ちへの「想像力」、トラブルに「耐えたり乗り越えたりする力」、…総合すると「人間関係力」であろう。…ではなぜこの力が育たなかったのか? 考えられるのは家庭や地域の崩壊、つまり学校以前の段階で「育っていない」からである。

学校教育の中でも人間関係力が育たなくなっている。学校では教壇上の教師と生徒が向き合っている。しかし、生徒同士は向き合っていない。生徒同士が向き合うことを可能にする学校行事は、いわゆる基礎学力向上の掛け声のもと、どんどん縮小の方向にある。これで、どうやって「いじめ」をなくすのか。「いじめ問題」は道徳教育がダメだから生じているのではなく、家庭・地域・学校が人間関係力を育てていないから生じているのだ。学校教育のあり方を決める人たちは、そのことをどう考えているのだろうか。

十月の上旬に北アルプスの涸沢(標高三三三〇m)に登った。孫は可愛い、つき合うのは疲れる。それでも頑張って子育てに協力したことへの褒美のつもりで出かけたのである。その涸沢は初冠雪に凍えていた。…そのとき撮影したもの一枚がこの写真である。

「ちんぐるま」は初夏、清楚な白い花を咲かせる、花卉が落ちると、その花卉を支えていた萼片が下に曲がり稚児車のような形状になるところから、このような名称でよばれるようになったのであろう。

物知り(知識人)と、知恵ある人はなかなか一致しない。物知りが増えて世の中良くなるのなら、高学歴社会の日本は世界一の品格を備えているはずだ。…こんなに品格のない日本になぜなったのか? 「嬰兒に帰れ」とは、小賢しい知恵を嫌った老子の言葉である。孫とつき合いながら、老子が言う「嬰兒に帰れ」に戻って物事を考えてみたい。稚児の視点は案外ジイーちゃんの視点に似ているかもしれないと、写真を見ながら思う私である。

